

極道のファイアーソセ



泉美
イラスト
アリナ
羽田
共著

極道のファイアンセ

《立読み版》

泉美 アリナ

イラスト 羽田 共見

その広大な敷地に建つ、大邸宅を目の前にして梶道哉は竦み上がってしまった。かじみちや

都内の中心部からやや離れた郊外とはいえ、外の道路からは中を覗き込むこともできない高塀に挟まれた格子の鉄門から邸宅の玄関まで車で乗り入れてさらに数秒走行できる距離がある。

まずそこで道哉は度肝を抜かれたのだ。

アパートの敷地入口から自宅扉まで歩いて数歩だった今までの住まいとは大違いである。

車留まりで停車したロールスロイスから下車した道哉は、大邸宅の巨影を見上げてあんぐりと口を開けてしまった。

「どうした道哉、なにをほうけている？」

反対のドアから颯爽と降り立ち道哉の横に並んだ背高の男の名前を辰巳佳孝たつみやしたかという。

広域指定暴力団、竜美会たつみかい会長の養子であり組の若頭であった。いずれは、竜美会のトップに立つ若き後継者である。

すっと切れ上がった濃い眉に涼しげな目元、高く細い鼻筋と肉厚な唇は、ドラマでよくみるなんとかって俳優によく似ていると道哉は彼を一目見て思った。

その俳優の名前が出てこないところが、道哉が芸能人に疎いという証拠なのだが、それはおいておい

ても、佳孝は一見すると俳優かモデルではないのだろうかと周囲に思わせるほど整った容姿をしていた。
「ほら、行くぞ」

そう言つて道哉に差し出す仕草もスマートなのに、彼が本当はヤクザの跡取りというのだから、見た目を裏切つていてもつたいたいないと道哉はつくづく思う。

差し出されたその手に戸惑いながら見上げる高い身長は、一六八センチの道哉には羨ましいばかりだ。毎日牛乳を欠かさず飲み、あとちよつと、せめて一七〇センチは超えたいと願っている道哉はいっこうに背が伸びないのに目前のこの男は、身長も恵まれた容姿もあっさり手に入れてしまっているのだから悔しくなる。

非の打ち所のない佳孝だが、たったひとつもし世の女性が眉間に皺を寄せるとしたらそれはヤクザであるということだけだ。ただそれさえも本家本元の跡取りとなれば、眼の色を変えて飛びつこうとする一部の夜の女性もいるだろう。

差し出された手を恨めし気に見下ろして道哉はふいとその手を無視して歩き出す。

「つて」

一歩目を踏み出した途端にカクンと足首をぐらつかせた道哉を、佳孝が素早く支える。

「つと、あぶねーなおい。緊張しているのか、お嬢さん」

「お、お嬢さんはやめてください。こんな……、ヒールの高い靴なんてはじめて履くから慣れていないだけです」

支えてくれた手をぱしりと叩き返し、道哉は再び足を踏み出したのだが、またすぐさまよろけて膝をカクンとさせてしまう。

「つたく、しよーがねーな」

腕を支えてくれたのかと思っていた道哉の体がふわりと浮かんだことに気が付けば、佳孝の両腕に横抱きに抱え上げられてしまっているのだ。

「な、なにするんですか？」

いわゆるお姫様抱っこをされてしまい道哉は慌てる。

「暴れると落とすぞ」

「うわっ」

佳孝がわざと腕の力を抜いて道哉を地面に放り落とそうとするので、ひやりとした道哉は慌てて彼の首に抱きついた。

「家の中まで抱えていってやるからおとなしくしている」

「お、下ろしてください。ぼ、僕自分で歩けますから」

「慣れないヒールで転んでけがでもしたら大変だろ。なんたって、おまえは俺の婚約者なんだからな」
にっと片頬を上げる意地悪な顔に、道哉は返す言葉がなく押し黙る。

「さて、納得できたなら。行こうかお嬢さん」

言い返すことができずにいる道哉に向ける佳孝の笑みは憎たらしいほどハンサムで、道哉は視線を逸らした。

婚約者と言われ、お嬢さんと呼ばれても、道哉も佳孝もれっきとした男である。

だが道哉の今の姿ときたら柔らかな生地クリーム色のワンピースを着せられて、女性用の高いヒールの靴を履いているのである。はじめて足を通した肌色のストッキングに皮膚をざわつかせ、さらけ出すと化粧までされてしまうと、自分でも驚くほど鏡の中の自分は女の子に見えてしまうのだった。

道哉に女装癖があるわけでもなく。佳孝と愛しあっているゲイカップルでもない。

つまりは、これには深い理由があるのだが、それもこれも軽々と道哉を抱き上げている目前のヤクザの若頭の策略なのだ。

だがそれに付き合わざる負えない状況に追い込まれているのは道哉の方だ。

だから、今は黙って従うしかない。悔しいが道哉は逆らえない立場なのである。

それでも、してやられてばかりいるほどおとなしい性格をしていない道哉は、意趣返しのもりで佳孝の後ろ髪をえいと引っ張ってやったのだ。

なのに、それにムっとした佳孝に放り投げられそうになり、冷や汗をかく羽目になったのもまた道哉のほうだった。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

極道のファイアンセ

《立読み版》

発行日 2011年8月4日

著者名 泉美 アリナ

イラスト 羽田 共見

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Arina Izumi 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。